

立つ鳥跡を濁さず

2021. 3. 20

「立つ鳥跡を濁さず」という言葉がある。「飛ぶ鳥跡を濁さず」ともいう。立ち去る者は、見苦しくないようきれいに始末をしていくべきという戒めである。また、引き際は美しくあるべきだということである。

この言葉を転勤という出来事で考えてみたい。自分の教員人生を振り返ると、「立つ鳥跡を濁さず」ではなく、“立つ鳥跡を濁す”であったとつくづく思われる。意図してそうなったわけではない。だが、結果的に転勤をする度に跡を濁してきてしまったように思う。

中でも、その最たるものが最初の転勤だった。小学5年生を担当し、学年主任も担っていた。通常ならば、小学6年生まで担任して卒業させてから転勤するところであろう。子どもたちからすればどうだったのだろうか。6年生まで担任をすると思っていた先生が、突然、中学校に転勤するというのである。

もちろん、あの頃の私は、子どもたちがどう思うだろうと考えた。だが、教員には転勤はつきものである。思い通りにいかないことは多々ある。仕方がないことと自分に言い聞かせた。

2度目の転勤では、担任をして卒業させたことはよかった。しかし、部活動の生徒たちがいた。部活動のことまで考えると、切りはないのかもしれないが、当時の生徒たちはどう思ったのだろう。自分の中学時代の部活動は、幸いにも3年間同じ先生の指導を受けることができた。それが当たり前だと思っていた。教員になり、自分が転勤の悲哀を味わうことになり、初めて自分の中学時代は恵まれていたのだとわかった。

部活動の場合、大変なのは私の後の顧問の先生である。ずいぶんと苦勞をかけたことと思う。自分ならば、私の後の顧問はやりたくない。

3度目の転勤では、担任はしていなかったが、やはり部活動の生徒たちがいた。タイミングがわるく、女子ソフトテニス部が県大会に出られるレベルになったところであり、男子はまだ部ができて2年目だった。にもかかわらず強かった。3年目が楽しみだった。

このような状況にあるにもかかわらず、顧問の先生が2年で、突然イタリアに行くというのである。生徒たちからしたら、青天の霹靂である。あっけにとられるばかりである。このときも私の後の顧問の先生は大変だったことと思う。

私がしてきたことは、小学5年生の私たちを見捨てて中学校にいつてしまった先生、部活動でがんばっている私たちを置いて転勤してしまっ先生、部活動で私たちを育てておきながら自分はイタリアにいつてしまった先生なのである。

こんなこともあった。中体連の支部大会では、当たり前のことだが、今までいた学校の生徒たちと大会会場で顔を合わせることになる。運がわるいと、対戦することもある。幸いにも直接試合をすることはなかったが、前の学校の生徒たちが私にあいさつをするだけでなく、ラケットをもっていろいろと相談にきたことがあった。私は聞かれたことに答えたのだが、多少驚いた。同時に、この生徒たちは、私がいなくなった後、ずっと困っていたのか、悩んでいたのかと思ったのである。複雑な思いを抱いたが、転勤するということはこういうことなのだと思った。

立つ鳥跡を濁すとしかいいようのない私の教員人生だが、やはり最初の転勤が一番やってはいけないものだったように思う。現在の勤務校である梁川高校を去るときには、「立つ鳥跡を濁さず」といきたいものである。